

張華の文學に見られる『老子』の影

佐竹保子

一 はじめに

阮籍・嵇康にやや遅れ、潘岳・陸機にわずかに先立つ西晉の文學者に、張華(二三一—三〇〇)字は茂先^①がいる。「寒素」の出自ながら司空に昇りつめ、陸機、陸雲、左思など次代を擔う文學者たちの強力な推挽者であったとされるが、いわゆる八王の亂に巻き込まれる形で非命の最期を遂げた。この張華のテクストは隨所に『老子』を織り込んでいる。小論はそれを確認し、『老子』の言説が張華の文學の全體とどのような關わりを持っていたのか、一つの推測を試みたいと思う。

二 「鷓鴣賦」

張華の代表作に、『文選』卷十三の收める「鷓鴣賦」がある。^②「其の詞を釋すに、知足知止の義有り」と、王鳴盛『十七史商榷』卷四十八は記す。「知足知止」とは『老子』四十四章の「足るを知らば辱められず、止まるを知らば殆うからず、以て長久なるべし」を指す。『十七史商榷』は、「鷓鴣の賦」の主旨が『老子』に基づくことを示唆している。

だが現代の研究者の多くは、「鷓鴣賦」が『老子』よりもむしろ『莊子』の影響を強く受け、その趣旨が郭象の『莊子注』の見解に一致す

ると説く。たとえば羅宗強『文學與魏晉士人心態』は「鷓鴣賦」はすべて莊子の思想によって人生を認識する」と言い、孔繁『魏晉文學和文學』も「太康詩人の張華は『鷓鴣賦』を作ったが、…張華の『道』の觀念は郭象と一致しており、齊物の觀念によれば、物には小も大もないから、萬物を超えて自得できると見ている」と記す。

たしかに賦の「鷓鴣」の「其の居は容れ易く、其の求めは給し易し。林に巢くうも一枝を過ぎず、食う毎に數粒を過ぎず」という姿は、李善も指摘するように、『莊子』逍遙遊篇にある許由の次の言葉に基づく。「鷓鴣は深林に巢くうも、一枝を過ぎず、偃鼠は河にみず飲むも、満腹を過ぎず」。また賦の結びには次のように言う。

鷓鴣巢於蚊睫、大鷗彌乎天隅。將以上方不足、而下比有餘。普天壤以遐觀、吾又安知大小之所如。(鷓鴣は蚊の睫毛に巢を作り、大鷗は天の隅まで羽を廣げる。上に較べれば足りないが、下に較べれば餘りある。天地をどこまでもはるかに見渡せば、私に大小の行き着く先がわからうか)

「天隅に彌る」「大鷗」の像は、『莊子』逍遙遊篇の冒頭に描かれる「其の翼は垂天の雲の若き一鷗」から來ている。最後の二句も李善の指摘どおりに、『莊子』秋水篇にある北海若の言葉をもととする。「道を以て之を觀れば、物に貴賤無し。…差を以て之を觀、其の大と

する所に因りて之を大とせば、則ち萬物に大ならざる莫く、其の小とする所に因りて之を小とせば、則ち萬物に小ならざる莫し。かく「鶴鷗賦」は、その素材と結びが「莊子」から出ているために、一見「莊子」の影響下にあるテクストのように思える。

だが、賦の壓倒的部分を占めるのは、大小の齊同を説くのではなく、「鶴鷗」と強く美しく珍しい鳥たちとを對比する敘述である。賦の序で、「鶴鷗」は次のように語られる。

色淺體陋、不爲人用、形微處卑、物莫之害、繁滋族類、乘居匹游、翩翩然有以自樂也。(色彩が目立たず容姿が劣り、人の役にたたないが、體が小さく低い所にいるので、何物も害を加えず、仲間を増やし、一緒に休み並んで遊び、ひらひらと好きに楽しんでゐる)

次いで、強く美しい鳥たちが配される。

彼鷺鷥鷓鴣、孔雀翡翠、或凌赤霄之際、或託絕垠之外、翰舉足以冲天、翮距足以自衛。然皆負翮嬰綴、羽毛入貢。何者、有用於人也。(あの鷺や鷓鴣や唐丸や白鳥、孔雀やかわけせみは、夜明けの空を越えたり、地の果てまで飛んだり、羽は天を衝き、嘴や蹴爪は自分を守る。だがみな矢にささりいぐるみに射られ、羽毛は貢ぎ物となる。何故か、人に有用だから)

中心となるこの對比のモチーフが、本文ではさらに念入りに繰り返される。まずみすばらしい「鶴鷗」の「自ら楽しむ」さまについて。

有翩翩之陋體、無玄黃以自貴。毛弗施於器用、肉弗登於俎味。鷹鷗過猶俄翼、尙何懼於置罟。(ひらひらした醜い體をはぐくみ、自慢できるような彩りも無い。羽毛は裝飾品につかわれず、肉はお供えにならない。鷹やハヤブサもびくりと翼を動かすだけで通

り過ぎ、まして鳥網をおそれたりしようか)

翳奮蒙籠、是焉游集。飛不飄颻、翔不翕習。其居易容、其求易給。巢林不過一枝、每食不過數粒。(小暗い茂み、そこに群れる。翻りもせず、さっと舞いもしない。住まいは體を入れ易く、食べ物は得易い。巢は一枝を過ぎず、食事は數粒を過ぎない)

棲無所滯、游無所盤。匪陋荆棘、匪榮陸蘭。動翼而逸、投足而安。委命順理、與物無患。(棲んでも執着せず、遊んでも滯らない。いばらの茂みを嫌がらず、蘭の茂みを喜ばない。翼を動かしては樂しみ、足を下ろしては安らいでいる。運命のまま道理のままに、物と面倒を起こさない)

右の「翩翩の陋體を育み、玄黃の以て自ら貴くする無し」「命に委ねるに順い、物と患い無し」は、『老子』二十二章の次の一節を想起させる。

自ら見(あら)わさず、故に明らかなり。自らはとせず、故に彰わる。自ら伐(ほこ)らず、故に功有り。自ら矜(う)らず、故に長し。夫れ唯だ争わず、故に天下能く之と争う莫し。

中ほどにある「飛ぶも飄颻せず、翔るも翕習せず」も『老子』の「自ら見わさざる」一例と見られる。また、「棲むに滯る所無く、遊ぶに盤まる所無し。荆棘を陋しとするに匪ず、陸蘭を榮えとするに匪ず」という何物にも執着しない態度は、『老子』二十九章の次の戒めを體得したものと見える。

爲す者は之を敗り、執する者は之を失う。

「鶴鷗」のこうした生き方を、賦は「伊れ茲の禽の無知なる、何ぞ身を處するの智に似たる」と贊嘆して次のようにまとめる。

不懷寶以賈害、不飾表以招累。靜守約而不矜、動因循以簡易。任

自然以爲資、無誘慕於世偽。(實を持って害を買ふこともなく、表面を飾って面倒を招くこともない。動かぬ時はつづまやかで自慢せず、動く時はなりゆきに任せてあつさり)。自然のままを持ち前とし、世俗の偽りに誘惑されない)

「静まれは約を守りて矜らず、動けば因循にして以て簡易なり」は、『老子』六十七章の次の一節を踏まえよう。

我に三寶有り、持して之を保つ。一に曰く慈、二に曰く儉、三に曰く敢て天下の先と爲らず。慈なるが故に能く勇なり。儉なるが故に能く廣し。敢て天下の先と爲らざるが故に能く成器の長たり。今慈を舍(す)て且に勇ならんとし、儉を捨て且に廣からんとし、後を捨て且に先たらんとすれば、死せん。

賦の「守約」が『老子』の「儉」「因循」が「敢えて天下の先と爲らず」に當たる。「鷓鴣」は「約を守り」「因循す」るので「世偽を誘慕せず」、命長らえる。これに對し、『老子』の言葉で言えば「儉を捨て且に廣からんとし、後を捨て且に先たらんと」して「死」に直面するものが、強く美しい鳥たちである。

雕鷗介其背距、鵠鷺軼於雲際。鷓鴣竄於幽險、孔翠生平遐裔。彼晨鳥與歸雁、又矯翼而增逝。咸美羽而豐肌、故無罪而皆斃。徒銜蘆以避繳、終爲戮於此世。(鷺や山鳥はその嘴や蹴爪にたより、白鳥や鷺は雲の涯を越える。唐丸や鷄は人氣の無い險しいところにひそみ、孔雀やカワセミははるか遠くに生まれる。あの朝のけりや歸る雁だつて、翼を舉げて高く飛んでいく。(だが)どれも美しい羽と豊かな肉、そのため罪がないのにすべて倒される。ひたすら葦をくわえていぐるみを避けるが、結局この世に殺される)

彼らは、この世で美とされ善とされるもののために、身を滅ぼす。背後に響くのは『老子』二章の次の一節である。

天下 皆 美の美爲るを知るも、斯れ惡のみ。皆 善の善爲るを知るも、斯れ不善のみ。

賦の「蒼鷹」や「鷓鴣」も、その強さと利口さゆえに自由を奪われる。蒼鷹鷺而受縛、鷓鴣惠而入籠。屈猛志以服養、塊幽繫於九重。變音聲以順旨、思摧翮而爲庸。戀鍾岱之林野、慕隴坻之高松。雖蒙幸於今日、未若疇昔之從容。(白い鷹は猛々しいので綱目を受け、鷓鴣は利口なので鳥かごに入れられる。激しい氣性を屈して養われ、ひとりぼっちで官中に幽閉される。聲を變えて主人の仰せのとおり、羽を砕いてお役にたとうとする。(だが本當は)崑崙や泰山の林野を懐かしみ、丘や島の高い松を慕う。今寵愛を受けていても、昔の自由には及ばない)

猛々しい強さが滅亡につながることを、『老子』の四十二章と七十六章は次のように語る。

強梁なる者は其の死を得ず、吾將に以て教への父と爲さんとす。人の生くるや柔弱、其の死するや堅強、萬物草木の生くるや柔脆、其の死するや枯槁、故に堅強なる者は死の徒。柔弱なる者は生の徒。是を以て兵強ければ則ち勝たず。木強ければ則ち兵たり。

利口さについては『老子』八十一章に次のようにある。
知る者は博からず、博き者は知らず。
賦は「鷓鴣」に對比される鳥たちの最後に「鷓鴣」と「巨雀」を挙げ

海鳥鷓鴣、避風而至。條枝巨雀、險嶺自致。提挈萬里、飄飄逼畏。夫唯體大妨物、而形瑰足璋也。(海鳥の鷓鴣は、風を避けて

到る。條枝國の大孔雀は、峯を越えて來る。萬里に手を携え、風に卷かれおそれつつ。そもそも體が大きければ物の妨げとなり、姿が立派なら珍しがられる。

珍しさや巨いさも安逸にはつながらない。

以上で「鷦鷯」と「鷦鷯」ならざる鳥たちの對比が終わる。前者には百八十餘り、後者には百六十餘り、ほぼ同様の字數が費やされている。

對比される兩者は決して齊同ではない。「鷦鷯」は「色淺く體陋しく」「卑きに處る」が、「物と患い無く」「智に似る」。他方の美しく強く珍しい鳥たちは「終に此の世に戮せられ」「疇昔の從容」を失い「物を妨」げる。雙方がそれぞれの立場で自足し自得しているのではない。「自樂」するのは「鷦鷯」のみなのだ。

しかもここまでの描出は、『莊子』の「無用の用」の説話とも微妙に相違する。たしかに賦の序は次のように語る。「鷦鷯」は「人の用を爲さ」ないから「翩翩然として以て自ら樂しむ有る」が、「彼の鷺鷥鷓鴣、孔雀翡翠」が「増を負い繳に嬰り、羽毛貢に入る」のは「人に用有る」からだ、と。無用さが、無用者自身にも傍らの他者にも安逸をもたらすという趣旨の説話は、『莊子』逍遙遊篇や人間世篇に見いだされる。

たとえば恵子が、魏王にもらったヒサゴが大きすぎてお椀にもひしやくにもならないと訴える話。莊子は「何ぞ以て大樽を爲りて江湖に浮かぶことを慮わざる」と答える。

ついでやはり恵子が、樽の太木は節くれだち曲がりくねって細工できないと、莊子の誇大な表現を當てこする話。莊子は言う。イタチは鼠を捕らえるが鼠にかかり、黒牛は大きい鼠を捕らない。樽の太木

は「何ぞ之を無何有の郷、廣莫の野に樹え、彷徨として其の側に無爲たり、逍遙として其の下に寝臥せざる。斤斧に天せられず、物に害する者無ければ、用いるべき所無きも、安んぞ困苦する所あらんや」と。人間世篇には、匠石と櫟社の太木の説話がある。太木の大きさは百かかえ、高さは山を見おろし、舟を作れるほどの枝が何本も伸びているが、匠石は振り返りもしない。弟子が尋ねると、舟を作れば沈み棺桶を作れば腐る「散木」だから、伐られもせずにあれほど大きくなれたのだ、と答える。

次いで南伯子綦と商丘の太木についての、類似の説話が語られる。その後には、「頤(あご)は齊(へそ)に隠れ、肩は頂(あたま)より高く、會撮は天を指す」支離疏が、そのグロテスクな肢體ゆえに、戦争にも土木工事にも驅り出されず天壽を全うしたという話が續く。

これらから分かるように、『莊子』の「無用者」は、きわめて大いにかきわめてグロテスクな異形に設定されている。賦の「鷦鷯」の、弱々しく目立たない像とは正反対だ。たとえば「無用の用」という抽象された趣旨が共通していても、具體的な像がかくも異なっている。『莊子』の説話が「鷦鷯賦」に織り込まれているとは言いがたい。賦の「鷦鷯」のイメージにより近いのは、『莊子』の大ヒサゴや太木や支離疏であるよりも、むしろ『老子』の「牝」であり「水」であろう。

『老子』の六十一章や七十八章に言う。
大國なる者は下流にして、天下の交たり、天下の牝たり、牝は常に靜を以て牡に勝つ。

天下に水より柔弱なる莫きも、而れども堅強を攻むる者は、之に能く勝る莫し。

靜かで柔弱な「牝」や「水」は「牡」やすべてのものにまさる。小さ

く弱々しい「鷓鴣」が大きく立派な鳥たちにまさっていたように。

以上のように、「鷓鴣賦」の中心部分の趣旨やそこに登場するものイメジはほとんどが『老子』に據っている。では、本章の冒頭に記したように、結びの一節が『莊子』秋水篇に據るのはなぜか。冒頭に引用しなかった四句も含めて、結びの一節を再掲する。

陰陽陶蒸、萬品一區。巨細舛錯、種繁類殊。鷓鴣巢於蚊睫、大鷗彌乎天隅。將以上方不足、而下比有餘。普天壤以遐觀、吾又安知大小之所如。

この一節は「鷓鴣は小鳥なり」(序)という常識を無化するために添えられていよう。「鷓鴣」は本當に小さいのか。「大鷗」から見れば「鷓鴣鷓鴣」(序)も小さいし、「鷓鴣」に較べれば「鷓鴣」も大きい。つまり「鷓鴣」の小ささは確定されていないから、彼の本質的な屬性ではない。

賦はここでもものの大小を、確實な認識の彼方に追いやる。大小の認識が曖昧になれば、「鷓鴣」は「鷓鴣鷓鴣」より大きいとも言える。賦はこれまでずっと、「鷓鴣」の「處身」「自樂」が「鷓鴣鷓鴣」に勝ると繰り返してきたのだから。その流れを承け、結びの五十餘字は、「鷓鴣」の現實の小ささを無化することで、「鷓鴣」の優越性をだめ押しする意味を持つだろう。もしもこれを、「鷓鴣」と「鷓鴣鷓鴣」の「處身」「自樂」を同一視する一節とすれば、賦のここまでの文脈を覆すことになる。兩者の齊同を明言していないこの五十餘字に、それだけの機能を負わせるのは無理があろう。

「鷓鴣賦」には、『莊子』の齊物説の視點や、「大」「小」が「逍遙」において齊同であるという郭象の論理の環節が缺けている。武内義雄「老子と莊子」は齊物説と逍遙説が「莊周學説の中心思想であること

張華の文學に見られる『老子』の影

はほぼ誤らないであろう」と言い、字同『中國哲學大綱』は「萬物を齊しくするという思想は、老子にはまだ存在せず、田駢や慎到の獨創である。馮友蘭『中國哲學史』も「老學はまた前後・雌雄・榮辱・虛實などの分別に意を注いでいる。：莊學は『死生を外れ、終始無し』だ。老學が意を注ぐ事を、莊學は意を注ぐに價しないと考えている」とする。「鷓鴣」とその他の鳥たちを分別した上で、前者の「瀟弱謙下」を稱える「鷓鴣賦」は、その意味で、王鳴盛の指摘通りに、いまだ『老子』の論理の範圍内にあるテキストと考えられよう。

三 「女史箴」

「鷓鴣賦」同様に『文選』に收められる張華の代表作に、「女史箴」がある。「女史箴」に先立つ女訓の類は少なくない。とくに後漢の皇甫規(一〇四―一七四)の「女師箴」(『藝文類聚』卷十五)に、張華の「女史箴」は構成が似ている。どちらもまず、天地の秩序と夫婦の秩序を結び付けて説き起す。

皇甫規「女師箴」

茫茫造化、あやめもわかぬ造化のはたらきで
二儀既分。天と地が分かれると
散氣流形、氣を散らし形を流し
既陶既甄。固めてすべてが作られた
在帝庖羲、庖犧が帝となると
肇經天人。はじめて天と人とを秩序だて
爰始夫婦、ここに夫婦が始まり
以及君臣。君臣にまで至った
家道以正、家の道が正しくなって

王猷有倫。王の道に道理ができた

ついで張華「女史箴」は、婦徳とそれを體現した春秋時代の「樊姬」「衛女」や前漢の「馮媛」「班妾」について語り、「女史箴」なりの女性史を辿る。皇甫規「女師箴」も、黃帝の時代から周代へと、婦徳の歴史を追っている。

皇甫規「女師箴」

婦徳尚柔、妻の徳は從順なのがよいから

含章貞吉。才能を潜めれば正しく

婉孌淑慎、從順に慎み深く

正位居室。役目を守り家にいる

施衿結褵、衿を着け裳を結び

虔恭中饋。うやうやしく食事の支度

肅愼爾儀、行いをつつしんで

式瞻清懿。清い善良さをあらわす

樊姬感莊、樊姬が楚の莊王を感動させたので

不食鮮禽。(王は)禽獸を食べべなくなり

衛女矯桓、衛公の娘は齊の桓公をいさめて

耳忘和音。耳に快い音楽を忘れた

志厲義高、志はしっかり節義は高く

而二主易心。だから二人の君主は心を改めた

玄熊攀檻、黒い熊が柵をよじ登り

馮媛趨進。馮媛は(元帝を守ろうと)急いだ

夫豈無畏、恐くない筈があらうか

知死不悟。死を覺悟し身を惜しまなかつたのだ

班妾有辭、班妾は(成帝の誘いを)断つて

昔在軒轅、

陶化正刑、

刑于壺闈、

以臨百官、

煌煌后妃、

玄紵是閑、

穆穆夫人、

爰採潔藥、

師禮莫遠、

而神罔時愆、

關雎首化、

萬國承流、

實有淑女、

允作好逑、

唐媛與媿、

文武盛周、

德音不回、

弘濟大綏、

割離同輩。み車に同乗する喜びを棄てた

夫豈不懷、(喜びを)思わない筈があらうか

防微慮遠。兆しを防いで遠くを見通したのだ

皇甫規「女師箴」と張華「女史箴」の分岐は、次の戒めを述べる部分で起る。皇甫規「女師箴」は「漸進は形われず、變起は外わるる無し。行いは著われ難くして喪われ易く、事は失われ易くして退き難し」と善を積み悪を未然に防ぐよう、また「上を奉じて惟れ敬、下を撫して唯れ慈」と、敬順と慈愛の心を持つよう諭す。いっぽう張華

「女史箴」が繰り返すのは以下のようなことだ。

道罔隆而不殺、物無盛而不衰。日中則昃、月滿則微。崇猶塵積、替若駭機。(道が高くなれば下らないことはなく、物が盛んになれば衰えないことはない。太陽は中天すれば傾き、月は満ちれば缺ける。高くなるのは塵が積もるよう(にゆっくり)、衰えるのは石弓を發射させるよう(に速い))…

勿謂幽昧、靈監無象。勿謂玄漠、神聽無響。無矜爾榮、天道惡盈。(薄暗いと言わなかれ、靈力あるものは無形を見る。はつきりしないと言わなかれ、神秘なものは無音を聴く。そなたの榮光を得意がるな、天の道は満ちるのを憎む)

無恃爾貴、隆隆者墜。鑑于小星、戒彼攸遂。比心蠱斯、則繁爾類。(そなたの貴さをあてにするな、盛んな者は墜ちていく。詩經の「小星」を手本に、女性の職分を戒めよ。こころを「蠱斯」になぞらえれば、子孫が榮える)

驩不可以驩、寵不可以專。專實生慢、愛極則遷。致盈必損、理有固然。(喜びは汚してはならず、寵愛は獨り占めにできない。獨り占めにすればおごりが生まれ、愛が極まれば移りゆく。満ちる

驩不可以驩、寵不可以專。專實生慢、愛極則遷。致盈必損、理有固然。(喜びは汚してはならず、寵愛は獨り占めにできない。獨り占めにすればおごりが生まれ、愛が極まれば移りゆく。満ちる

ところまで至れば必ず損なわれるのは、理の當然……

故曰翼翼矜矜、福所以興、靖恭自思、榮顯所期。女史司箴、敢告庶姬。(だから言う、恭しく慎むのは、幸いがおこる原因、謹んで反省すれば、名聲がいつかやってくる、と。女史は戒めの言葉を司るので、敢えて宮女たちに告げる)

「盈に致れば必ず損なわる」という「理」が、「道隆まりて殺がれざるは罔く、物盛んとなりて衰えざるは無し」、「日中すれば則ち長き、月滿つれば則ち微く」、「天道は盈つるを惡む」、「隆隆たる者は墜つ」、「愛極まれば則ち遷る」と、さまざまなヴァリエーションで繰り返される。この執拗な繰り返し、身を慎んで「榮」「貴」「寵」「愛」を極めないようにとの戒めに説得性を持たせる。

先行する女訓の文獻に、盈ちることの危険をかくも執拗に説くものは見出しがたい。もっとも古い女訓の文獻の一つである後漢の班昭(二世紀後半〜二世紀前半)の「女誡」七章(『後漢書』列傳卷七十四曹世叔妻傳)は、卑弱第一と敬慎第三で謙讓と止足を勧めているが、盈ちることの危険を積極的に説いてはいない。二世紀中頃の人と見られる杜泰姬の「諸女及び婦を戒む」(『華陽國志』卷十下)は、娘や嫁に子育ての方法を語ったものであり、皇甫規「女師箴」は、先述の通りである。荀爽(二二八〜一九〇)の「女誡」(『藝文類聚』卷二十三)は、「節を竭くし理に従い、昏定晨省」して「順婦」であるよう、また「七歳の男は、王母も抱かず、七歳の女は、王父も持さず」と「陰陽を隔て」るよう説く。蔡邕(二三二〜一九〇)の「女訓」(『北堂書鈔』卷一〇九、『太平御覽』卷五七七)は、琴の演奏を例として舅姑への恭順を説き、同じく「女誡」は、服装のきまりを記し、化粧に喩えて心を磨くよう諭す。二世紀末の楊禮珪の「二婦を教む」(『華陽國志』卷十下)は粗食

張華の文學に見られる『老子』の影

と勞働の重要さを語り、魏の程曉の「女典篇」(『藝文類聚』卷二十三)は、「婦人の四教」のうち「婦德」「婦言」「婦公(工)」は重要だが「麗色妖容、高才美辭」だけでは危険だと戒める。魏の傅幹の「皇后箴」(『藝文類聚』卷十五)は、殷の妲己や漢の王氏や趙飛燕の例を挙げ、内朝を治めることの重要さを説く。晋の裴頠の「女史箴」(同)は、「爾の形は信に直に、影も亦た曲がらざれ」と、どこまでもまっすぐ端正であれと繰り返す。ほかに吳の謝承の「三夫人箴」(『初學記』卷十)があるが、わずかに二十四字の断片で、その範囲では盈ちることの危険を説いていない。

一篇だけ晋の王虞の「婦德箴」(『藝文類聚』卷四十)が、満月や日光の比喩で満ち欠けの道理を語っている。「團圓たる明月、魄滿つれば則ち缺く。亭亭たる陽暉、曜過ぐれば則ち逝く。天地すらお盈虧有り、況んや華艷の浮華なるをや。是を以て淑女は之に鑑み、戰戰兢兢たれ」。だが書き手の王虞は、『晋書』卷七十六本傳によれば、王導の従弟であり、永嘉初(三〇七)年以後に元帝のもとで活躍している。張華が六十九才で殺されたのが三〇〇年だから、張華よりもはるかに年下になる。「婦德箴」は「女史箴」を襲った可能性が高い。そうとすれば、何篇かの女訓の文獻の中で、張華「女史箴」の新しさは「盈に致れば必ず損す」る「理」を敷衍した所にある。

ではこの哲學は何に基づくのか。「女史箴」の「日中すれば則ち長き、月滿つれば則ち微く」に、李善は典故として『易』豊卦の象傳を引く。「日中すれば則ち長き、月盈つれば則ち蝕く。天地の盈虚は、時と消息す。而るに況んや人に於いてをや、況んや鬼神に於いてをや」。同様に「爾の榮えを矜る無かれ、天道は盈つるを惡む」という聯にも『易』謙卦の象傳が引かれる。「天道は盈つるを虧きて謙に益

し、地道は盈つるを變じて謙に流し、鬼神は盈つるを害して謙に福いし、人道は盈つるを惡みて謙を好む。だが、上の二聯に増して重要な「盈に致れば必ず損するは、理に固より然る有り」という聯に、李善は「文子に、老子曰く、天道極まれば即ち反し、盈つれば即ち損す。日月是れなり」とを引く。

老子の言説と『易』とはいかなる關係にあるのか。『漢書』卷三十藝文志は、老莊思想が『易』の謙卦に合致すると言う。「道家者流は、…清虚以て自ら守り、卑弱以て自ら持す。此れ君人南面の術なり。堯の克く攘り、易の嗛嗛たるに合す」。中井履軒『老子雕題』はさらに分析を進めて、『易』の謙遜を勧め過剛を戒める半面が、『老子』に重なるると説く。「夫れ易と老子と相似たる者は、必ず是れ陰爻陰位、柔巽用を爲すの言、或いは陽爻に於いてその過剛を戒むる者のみ、若し夫れ陽爻陽位、剛決用を爲す者は、老子にこれ無きなり。適に以て老子の雌道たるを證するに足るなり」。武内義雄「易と中庸の研究」は、これを「最も肯綮にあたる言といつてよい」と評價する。

李善や漢志、中井説、武内説を参考にすれば、張華「女史箴」の「盈」を戒める主張は『易』の半面に合致するだけで、全面的に重なるのは『老子』の方になる。「女史箴」の主張の根底に『老子』が存在する。

實際『老子』には「盈」を戒める言説が多い。以下の九章、三十章と五十五章の同文、さらに七十七章のように。

持して之を盈たすは、其の已むるに如かず。揣りて之を税（する）どくすれば、長く保つべからず。金玉堂に満つれば、之を能く守る莫し。富貴にして驕れば、自ら其の咎を遺す。功遂げ身退くは、天の道なり。

物壯なれば則ち老ゆ、是を不道と謂う、不道なれば早く已む。天の道は其れ猶お弓を張るがごときか。高き者は之を抑え、下き者は之を擧げ、餘り有る者は之を損し、足らざる者は之を補う。天の道は、餘り有るを損して足らざるを補う。人の道は則ち然らず、足らざるを損し以て餘り有るに奉ず。孰か能く餘り有り以て天下に奉ぜん、唯だ道有る者のみ、是を以て聖人の、爲して恃まざ、功なりて處らざるは、其の賢しきを見わすを欲せざるなり。女訓のジャンルの中での張華「女史箴」の主張の獨自性は、『老子』に由來すると考えてよいだろう。

四 「遊獵篇」と「遊俠篇」

張華は、三十首ほどの樂府を残している。燕射歌辭二十首、舞曲歌辭二首、鼓吹曲辭二首、雜曲歌辭六首である。ほとんどが宮廷音樂のための作だが、そうではない雜曲歌辭六首のうち、「遊獵篇」「遊俠篇」「輕薄篇」「壯士篇」の四首までが、『樂府詩集』その他に先行する作品を持たない。林田愼之助「魏晉南朝文學に占める張華の座標」の指摘通り（これらの）篇題はすべて張華の創造にはじまるものと考えられる。このうち「遊獵篇」と「遊俠篇」の末尾に「老子」の名が織り込まれている。

「遊獵篇」（『樂府詩集』卷六十七）は、壯麗な狩りを描く長編樂府である。「歲暮 凝霜結び、堅氷 幽泉を涸（ふさ）ぐ。厲風 原隰を蕩がし、浮雲 昊天を蔽う」という冬の野の描出から始まって、豪華な狩獵隊の出發、空と川を網で覆い鳥獸を追う大規模な狩りの様子、數え切れない獲物、それらを賞味する野の夜宴などが、五十句以上にわたって鋪陳される。劉文忠氏はこれを、前漢の司馬相如の「子虛賦」

『文選』卷七「上林賦」(同卷八)や揚雄の「羽獵賦」(同卷八)「長楊賦」(同卷九)などの畋獵の大賦に學んだものだという。「遊獵篇」の末尾が、次のような勸戒の言葉で結ばれるのも、漢の大賦の様式に倣っている。

遊放使心狂、覆車難再履。伯陽爲我誠、檢跡投清軌。(好き勝手な生活は心を狂わせ、引つ繰り返った車の跡を二度踏むことはできない。老子が私に戒めてくれた、その足跡をしらべ清いわだちに身を投じよう)

『老子』十一章の「五色は人の目を盲ならしめ、五音は人の耳を聾ならしめ、五味は人の口を爽わしめ、馳騁田獵は人の心を發狂せしむ」に據る。

ところが「遊獵篇」の襲う漢魏の畋獵の賦に、勸戒の結びで、老子の教えを明言する例は見出しがたい。たとえば司馬相如の「上林賦」(『史記』卷百十七、篇題は『文選』卷八による)は、次のような「勸戒」の勸戒を記す。「若し夫れ終日暴露馳騁し、神を勞し形を苦しめ、車馬の用を罷し、士卒の精を抗(そこな)い、府庫の財を費し、而して徳厚の恩無く、務むるは獨り樂しむに在り、衆庶を顧みず、國家の政を忘れ、而して雉兔の獲を貪れば、則ち仁者は由らざるなり」。一聯目が「老子」十二章に據るようだが、「遊獵篇」の「伯陽 我が爲めに誠む」のように明言していない。揚雄「羽獵賦」(『漢書』卷八十七上揚雄傳上、『文選』卷八)の勸戒は、儒教色をさらに強め、「子虛賦」の描いた「雲夢」の狩りを批判し、周の文王の「靈臺」の事跡を推賞する。「楚の」雲夢を奢とし、(宋の)孟諸を侈とし、(楚の)章華を非とし、(文王の)靈臺を是とす。離宮に徂くこと罕れにして觀游を輟む。君臣の節を立て、賢聖の業を崇び、未だ苑囿の麗、游獵の靡に

張華の文學に見られる『老子』の影

皇まあらざるなり」。同じ揚雄の「長楊賦」(『漢書』卷八十七下揚雄傳下、『文選』卷九)も「三王の田に復り、五帝の虞に反らん」と戒める。前漢の畋獵の賦の敘述は、後漢の京都の賦に、モチーフの一つとして流れ込む。そこでも畋獵への勸戒は、ほとんどが儒教的な立場で記される。たとえば班固「東都の賦」(『文選』卷一)は、「西都の賦」(同)に描いた上林苑での狩獵と太液池や昆明湖での遊びを批判するのに、皇帝の學問所を持ち出す。「太液昆明、鳥獸の囿は、曷んぞ辟雍海のごとく流れ、道德の富むに若かん」。張衡「東京の賦」(『文選』卷三)では、殷の湯王と周の文王の故事を織り込み、さらに「詩經」魯頌の「泮水」を引く。「樂しみを窮めず以て儉を訓え、物を彈くさず以て仁を昭らかにす。天乙(湯王)の罟を弛めるを慕い、教祝に因り以て民を懷け、姬伯(文王)の渭陽に之くに饑り、熊羆を失いて人を獲。澤は昆虫をも浸し、威は八萬に振るう。『樂しみを好むも荒さむ無く、允(まこと)に文 允に武』」。

ほかに『藝文類聚』卷六十六に、張衡「羽獵賦」、王粲「羽獵賦」、應瑒「西狩賦」「馳射賦」、魏の曹丕「校獵賦」があるが、いずれも斷片のせいか畋獵への批判的な言辭を含まない。曹丕の「行行遊且獵」で始まる「詩」(『太平御覽』卷三三三)、曹植「擊舞歌」五首の孟冬篇(『宋書』卷二十二樂志四)、晉の夏侯湛「獵兔賦」(『藝文類聚』卷六十六)なども、狩りへの頌歌である。唯一、張華より十五歳年下の潘岳の「射雉賦」(『文選』卷九)が次のような勸戒を結びに置く。「若し乃ち耽樂流通し、放心移らず、其の身の恤を忘れ、其の雄雌を司り、樂しみて節無く、端操に虧くる或れば、此れ則ち老氏の誠むる所、君子は爲さず」。ここで、張華「遊獵篇」同様に「老子」が明言される。

張華や潘岳の詩賦以前に、狩りへの戒めに『老子』を織り込んだの

は張衡「歸田賦」(『文選』卷十五)である。隱者のささやかな漁獵を六句にわたって詠じたのちに記す。「般遊の至樂を極め、日夕と雖も効れを忘る。老氏の遺誠に感じ、將に鵞を蓬廬に廻さんとす。隱逸をテーマにした賦が『老子』を引用するのは何の不思議もないが、晉初の張華や潘岳は、これを改獵の詩賦に導入する。

とりわけ張華「遊獵篇」は、篇の大部分で改獵の蒼澤さや壯麗さを描き盡くした後に、「伯陽 我が爲めに誠む、跡を検し清軌に投ぜん」と結ぶ。直前まで描いてきた華やかな改獵を否定し去り、隱逸(「清軌」)を志す言辭である。これに對し潘岳「射雉賦」は「樂しみて節無く、端操に勵ぐる或れば、此れ則ち老氏の誠むる所、君子は爲さず」と記す。狩獵をすべて否定するのではなく、節度に缺けた「君子」らしからぬ狩りを戒める筆調だ。「樂しみを好むも荒さむ無く、允(まこと)に文 允に武」をよしとする漢賦の勸戒に通じている。張華「遊獵篇」の方が主要部分と結びの落差が大きい。この落差の大きさが、最後の「老子」の登場を、より印象深いものにしてゐる。

張華の新題の樂府で「老子」の名を織り込む一つ一つの例は「遊俠篇」(『樂府詩集』卷六十七)である。「遊俠篇」は、全二十句中十六句にわたって、遊俠たちの「稱首」(『漢書』卷九十二「遊俠傳」とされる「四公子」、すなわち戰國齊の孟嘗君、魏の信陵君、趙の平原君、楚の春申君の事跡を歌う。そのうち結びの四句で彼らを否定するのは、「遊獵篇」の構成と同様である。

美哉遊俠士、何以尙四卿。我則異於是、好古師老彭。(すばらしい遊俠の男たちは、どうして四公子をとらうとぶのか。私の場合はこれと異なり、いにしえを好み老子や彭祖を先生としよう)

末句は『論語』述而篇の「子曰く、述べて作らず、信じて古えを好

む、切かに我が老彭に比す」を襲う。『論語』の「老彭」について、魏の何晏の「集解」に引く後漢の包咸の説には「老彭は、殷の賢大夫なり」とある。だが後漢末の鄭玄は「老は老聃、彭は彭祖なり」(『經典釋文』所引)と二名を列記したものとし、魏の王弼も「老は是れ老聃、彭は是れ彭祖なり」(『周易正義』所引)と言う。「遊俠篇」が包咸・何晏の解釋に據っていたか、鄭玄・王弼のそれか明言はできない。だが、「遊俠篇」とまったく同時代の詩篇に、老子と彭祖を併稱した句が幾つか見出せる。孫楚(二二八?~二九三年)「征西の官屬の、陟陽侯に送りしときに作る詩」(『文選』卷二十)の四聯目、嵇紹(二二〇~三〇四年)「石季倫に贈る詩」(『藝文類聚』卷二十三)の九聯目、それに石崇(二四九~三〇〇年)「思歸歎」(同卷二十八)の十九、二十句目に、それぞれ次のようにある。

莫大於殤子、彭聃猶爲天。(若死にした子はほど命長い者はなく、彭祖や老子でも夭折だとする)

遠希彭聃壽、虚心處冲默。(はるかに彭祖や老子の長壽をのぞみ、心を虚しくして深い沈黙の中にしよう)

舒篇卷兮與聖談。釋冕投綬兮希彭聃。(書を繕いて聖人と語り、冠をぬぎ印綬を棄てて彭祖や老子を慕おう)

右の數句同様、「遊俠篇」の「老彭を師とす」も老子と彭祖の併稱である可能性が高い。「遊俠篇」の末四句は、老子と彭祖の存在を梃子に、遊俠の「稱首」たちの生き方を否定したものと讀むことができ

五 「何劭に答う」詩

樂府のみならず、張華の詩にも、『老子』に主導された一篇がある。

『文選』卷二十四の收める「何劭に答う」二首其の一である。全二十句の詩の前六句が官僚生活の多忙と窮屈を訴え、後漢末の劉楨「雜詩」(『文選』卷二十九)の詩想を襲っている。

劉楨「雜詩」

吏道何其迫、役人生活は何と追い立てられること
窮然坐自拘。窮屈で何とはなしに拘束される
職事相填委、
文墨粉消散。
纓綬爲微纒、冠のひもは美しい繩
馳翰未暇食、
日昃不知晏。
文憲焉可踰。きまりからどうしてはみ出せよう
沈迷籍領書、
日昃不知晏。
恬曠苦不足、のびやかな時間はまったく足りず
沈迷籍領書、
日昃不知晏。
煩促每有餘。忙しさはいつもいっぱい
回回自昏亂。

繁忙から心身を解き放つものが、劉楨「雜詩」では高みからの眺望だが、張華「何劭に答う」では、それが友人の何劭からの贈詩に置き換えられる。

良朋貽新詩、良き友ができたばかりの詩を贈り

釋此出西城、

示我以遊娛。私に楽しみを與えてくれた

登高且遊觀。

穆如灑清風、和やかさは吹きわたる清い風のように

方塘含白水、

奐若春華敷。華やかさは春の花が敷きつめたよう

中有鳧與雁。

下の劉楨「雜詩」十句目の「鳧と雁」は、とらわれない自由の象徴だ。

以下「雜詩」は、鳥たちの境涯への憧れを述べて終わる。

安得肅肅羽、いったいどうしたら羽をしゅっしゅと鳴らし

從爾浮波瀾。お前たちのあとについて波に浮かべられるのか

いっぽう張華「何劭に答う」は、官界を引退し、隣人の何劭と過ごす穏やかな日々を夢みる。

自昔同寮采、昔から役所がいっしょで

於今比園廬。今は庭と家となりどうし

張華の文學に見られる『老子』の影

衰夕近辱殆、衰え老いて恥辱と危険に迫りつつあり

庶幾並懸輿。ともに隠退の車を壁に掛ける日を待ち望む

散髮重陰下、冠の下の髪を深い木陰のもとで解き

抱杖臨清渠。杖を抱いて清らかな淵に臨み

屬耳聽鶯鳴、耳を澄まして鶯の聲を聞き

流目翫鯈魚。目を移してきらめく魚を愛で

從容養餘日、ゆったりと餘生を養い

取樂於桑榆。老年を樂しみたいもの

隠退を願う契機として配される十三句目「衰夕 辱殆に近づく」は、李善の指摘通り、『老子』四十四章の次の言葉が踏まえる。「名と身と孰れか親しき、身と貨と孰れか多き、得ると亡うと孰れか病なる。是の故に甚だ愛すれば必ず大いに費やし、多く藏すれば必ず厚く亡う。足るを知れば辱められず。止まるを知れば殆うからず」。『老子』九章や七十七章の次の一節も、詩の後半を支えていよう。「功遂げ身退くは、天の道なり」。『天の道は、其れ猶お弓を張るときか。高き者は之を抑え、下き者は之を擧げ、餘り有る者は之を損し、足らざる者は之を補う。：是を以て聖人は、爲すも恃まず、功成りて處らず」。

先行する劉楨「雜詩」は、鳥たちの自由への羨望で終わっていた。「回回として自ら昏亂す」る主人公は、「西城」の「高み」に呆然と佇んだままだ。彼は鳥たちのもとには辿りつけない。主人公と自由との間には深い龜裂が走っている。

これに對し「何劭に答う」の主人公は、『老子』によって救い上げられる。「何ぞ其れ迫られ」「自ら拘らる」彼は、まず「良朋」の「新詩」によって「游娛」し、さらには「身退く」未來の幻影によって「重陰の下」「清渠」のほとりへといざなわれる。劉楨「雜詩」の描い

た行き場のない宙吊り状態が調停され、贈答詩としての穩當さが保たれる。詩の緊密度や切實感では、劉楨「雜詩」が勝る。だが「何劭に答う」も、後半を『老子』に依據することで、別種の靜謐な境地を創り出そうとする。その工夫は認められていいだろう。

「何劭に答う」と對をなすと考えられる贈詩も、『文選』に残っている。何劭の「張華に贈る」(『文選』卷二十四)である。その末尾は「爵を茂陰の下に擧げ、手を携え共に躊躇せん。奚んぞ用て形骸を遺れん、筌を忘るるは魚を得るに在り」と『莊子』外物篇に據っている。「何劭に答う」が『老子』に據るのと好對照を見せている。

張華にはほかに「相風賦」という風見の頌歌がある。張華より七歳年下の傳咸の「相風賦序」(『太平御覽』卷九)が、これについて次のように言及している。「相風の賦は、蓋し亦た衆し。然れども辭義は大となり。唯だ中書張令のみ、太史の相風の、獨り文飾無きを以ての故に、特に之を賦せり」。

たしかに張華の「相風賦」は、序文(『太平御覽』卷九)でも本文(『藝文類聚』卷六十八)でも對象の飾りのなさを強調している。

太史侯部、有相風在西城上、而作者弗爲。豈以其託處幽閑、遠衆特立、無羽毛之飾、而丹漆不爲之容乎。(太史の物見の部署に、風見が西の城壁の上にあるのに、文筆家は描こうともしない。ひっそりした所に、ほかと異なつて獨り立つており、羽毛の飾りも無く、丹や漆が塗られていないからだろうか)……

辯風侯方、必立準極。循物致用、器不假飾。(風の方向を見定めるため、必ず棟木の上に立つ。物に従つて役に立ち、姿は裝飾を借りない)……

嘉創制之窮理、諒器淺而事深。(つくりが道理を窮めているのが

すばらしく、まことに姿はみすばらしいがはたらきは深い)

詠物の賦が、對象の美しさを細やかな造作を鋪陳するのが常であることを考えれば、對象の質素さを贊嘆する張華「相風賦」は、傳咸の序の指摘するとおりに、異色の作と言えらる。ところで、質朴をよしとする言説は『老子』の中に散見する。十九章の「素を見し朴を抱き、私を少なくし欲を寡くせよ」、二十九章の「是を以て聖人は其の厚きに處り奢を去り泰を去る」、三十八章の「是を以て大丈夫は其の厚きに處り其の薄きに處らず、其の實に處り其の華に處らず」、五十七章の「人に伎巧多ければ、奇物滋す起こる」などのように。同題の賦群の中で張華「相風賦」の獨自性が、質朴の賞賛にあるならば、それも『老子』に學んだ可能性が高いだろう。

六 おわりに

『文選』に收められる張華賦の代表作の「鷓鴣賦」は、その論旨の骨格が、一見小さくみすばらしく弱々しいものが強く美しいものに勝るといふ『老子』の主張に據っている。同じく『文選』に採録される「女史箴」は、先行する女訓の文獻と比較する限り、「盈ちることを戒める」點で獨特である。張華「相風賦」も、當時同題の賦が多作された中で、その獨創性は質朴さの強調にあつたと、傳咸「相風賦序」が傳える。盈ちることへの戒めも質朴さの強調も、ともに『老子』の説く主張の一つである。さらに、漢の大賦に倣つた樂府の「遊獵篇」は、その勸戒の結びに『老子』を持ち出し、「俠客篇」の末尾の勸戒も『老子』に據っている。『文選』に採録される「何劭に答う」は、前半で劉楨の名篇「雜詩」を襲いながら、後半に「功成りて處らず」といふ『老子』の言説を用いて獨自性を出そうとしている。

張華のテクストの重要な部分に『老子』が編み込まれている。張華より二十二歳年上の阮籍のテクストなら、見出されるのは『莊子』の言説や發想だが、張華の場合は『莊子』よりもむしろ『老子』に片寄る。阮籍が張華を「王佐の才なり」と評價したという逸話が生まれたのは、『莊子』の奔放さに巻き込まれるようにして深淵に墜ちていく阮籍のテクストと、『老子』の靜謐に同調するように穩當な歸着點を見いだす張華のテクストとの差異にも、その一因を負っている。

では、張華の文學の全體と『老子』とはどのような關わりを持つのか。張華の文學は、『詩品』に「疏亮の士は、猶お其の兒女の情多く、風雲の氣少なきを恨む」と記されるように、閨怨の情を寫し出すことに長けている。「情詩」五首のような男女の愛の贈答詩や、「雜詩」三首其の一のように閨怨の手法を用いた詠懷詩にも、すぐれた成就を示している。彼の文學における閨怨風的情感への傾きは、『老子』の「牡」よりも「牝」、「動」よりも「靜」、「堅強」よりも「柔弱」を肯定する主張と通じてはいないだろうか。『老子』のこうした主張の背景があつてこそ、張華の文學は「兒女の情」に深く没入できたのではないか。

さらに張華は、陸機兄弟などの南人や、成公綏・左思などの寒門の人士を、こだわらずに推擧したと傳えられる。「博物志」という「神仙・仙藥・仙域・方士・方術の記事で埋められている」書物の編者にも擬せられている。これらは、六朝から唐にかけての知識人たちが、張華を、社會的文化的な秩序の上で劣位にあるものに關心を注ぎうる人物と見なしてきたことを示すだろう。その認識はどこから來たのか。要因を張華自身の「寒素」の出自や當時の政治状況に歸す議論は多いが、同時に彼のテクストが、『老子』の「天下皆美の美爲るを知

張華の文學に見られる『老子』の影

るは、斯れ惡のみ、皆善の善爲るを知るは、斯れ不善のみ」に通ずる價值轉倒の發想をはらんでいることも見逃すべきではないだろう。『老子』は、張華の文學とその人物像の形成に、看過できない影を投げかけていると思われる。

注

- (1) 『晉書』卷三十六に本傳がある。
- (2) 現存する張華賦六篇（鶴鵲の賦」「歸田の賦」「相風の賦」「永懷の賦」「感婚の賦」「朽杜の賦」）のうち、『文選』に採録されるのは「鶴鵲の賦」一篇である。『文選』は尤刻本を用いる。
- (3) 王昶「老子道德經注」（樓宇烈『王弼集校釋』、中華書局、一九八〇年）による。
- (4) 浙江人民出版社、一九九一年。引用文は一九九頁。
- (5) 中國社會科學出版社、一九八七年。引用文は六八〇九頁。ほかに林田慎之助「魏晉南朝文學に占める張華の座標」（『中國中世文學評論史』一七五～二一七頁、創文社、七九年。初出は『日本中國學會報』、六五年）が「これに先んじて、阮籍の『詠懷詩』にも、…郭象と全くおなじ思想的傾斜を表白した詩歌がある。…ところが、張華の場合は、その小宇宙の思想が『鶴鵲賦』の主題として、全面的に展開されているところに、極めて特徴的な問題を含んでいる」（一八二～三頁）、松本幸男「若き日の張華」（『魏晉詩壇の研究』四六七～四八三頁、朋友書店、九五年。初出は『立命館文學』五〇〇、八七年）が『鶴鵲賦』は相對の世界にあつて『分』に應ずることと『無用の用』とを説くものであるが」（四七六頁）と『鶴鵲賦』の趣旨について述べる。
- (6) 『莊子』は續古逸叢書本『南華真經』及び郭慶藩『莊子集釋』に據る。
- (7) 『莊子』山木篇の、「材」（有用者）も「不材」も「天年」を終えられ

ず「材與不材之間」も「似之而非也」とする認識も、無用者が有用者より全うできるとする「鶴鶴賦」の趣旨と抵觸する。

(8) 『武内義雄全集』第六卷八〇—一四九頁(角川書店、一九七八年。初出は岩波書店、一九三〇年)。引用文は一〇三頁。

(9) 商務印書館、一九五八年版。引用文は三〇四頁。

(10) 中華書局、一九六一年版。引用文は二五頁。

(11) 『莊子』天下篇に「關尹老聃：以濡弱謙下爲表」とある。

(12) 『藝文類聚』卷五十六所引王隱『晉書』や現行の『晉書』本傳は、阮籍が「鶴鶴賦」を見て「王佐の才なり」と讃えたと傳える。これは事實としてよりも、『文心雕龍』才略篇が「其鶴鶴寓意、即韓非之說難也」と記すのと同様に、「鶴鶴賦」受容史の一環として位置付けるべき敘述だろう。つまり六朝から唐代初めにかけての歴史家たちが、「鶴鶴賦」を、阮籍がそう讃えるのにふさわしいテクストだと認識していたということ。その認識の持つ意味については、林田氏前掲論文一八四頁に興味深い分析がある。

(13) 『文選』卷五十六所收。張華のテクストで『文選』に收められるのは、「鶴鶴賦」、「女史箴」、「答何劭詩」二首(卷二十四)、「雜詩」一首(卷二十九)、「情詩」二首(同)である。なお、尤本『文選』は、題と李善の題注を「女使箴」に作るが、尤本『文選』の本文に合わせて「女史箴」に統一した。

(14) 山崎純一「張華『女史箴』をめぐって」(『中國古典研究』第二十九號 一八頁—四五頁、一九八四年)は後漢末以後の女訓の類を集めている。

(15) 劉琳『華陽國志校注』(巴蜀書社、一九八四年)卷十下に「杜泰姬、南鄭人、趙宣妻也」(八一頁)、「宣子：瑜少有公室、…司空張溫謂之曰：…(八〇頁)、『後漢書』卷八靈帝紀に「中平元(一八四)年…大司農張溫爲司空、…二年…八月以司空張溫爲車騎將軍」とある。

(16) 『文選』卷五十六張華「女史箴」李善注、『太平御覽』卷三六五、四五

九、七一四、八一四所收。

(17) 前掲『華陽國志校注』卷十下に「禮注：生二男、長妾張度遠女」(八一頁)、「張則：靈帝崩後、大將軍袁紹表爲長史、不就、丞相曹公拜度遠將軍」(八〇〇頁)とある。靈帝の崩御は一八九年。

(18) ただし李善が引くのは豊卦象傳の最初の二句と、謙卦象傳の「鬼神」一句に止まる。『易』は王弼「周易注」(樓宇烈前掲書)による。

(19) 『日本儒林叢書』第六卷(鳳出版、一九七八年)所收本。

(20) 『武内義雄全集』第三卷八〇—一二二頁(角川書店、一九七九年。初出は岩波書店、四三年)。引用文は一二二頁。

(21) 李善注所引の晉の曹嘉之『晉紀』は「張華懼后族之盛、作女使箴」と、「女史箴」は賈后を戒める意圖で作られたと解釋する。この説も、「女史箴」受容史の一環に位置付けるのが妥當であろう。小章は、考察の焦點を、類似の文獻における「女史箴」の書き方の獨自性に絞り、受容史には觸れない。

(22) 前掲林田論文二二四頁。

(23) 『古詩鑑賞辭典』(中國婦女出版社、一九八八年)四七九—四八一頁。

(24) 阮籍の「大人先生傳」に當たるものが張華の場合は「鶴鶴賦」である。

(25) 狩野直喜『魏晉學術考』(筑摩書房、一九六八年)も(張華の詩の)「古樸なるものは、寧ろ強ひて古體を學びて作りしものなるが、情詩の如きこそ彼の本色かも知れぬ」(一六〇頁)と記す。

(26) 余冠英『漢魏六朝詩選』(人民文學出版社、一九五八年)一六六頁や湯貴仁「兩處相思見痴情」(同社『漢魏六朝詩歌鑑賞集』二二二—二四〇頁、八五年)の解釋による。

(27) 前掲林田論文一八六頁。